web版

ことぶき共同診療所だより

第 38 号

2014 年 12 月 12 日発行

〒231-0025 横浜市中区松影町 2-7-17 リバーハイツ石川町 1･2F
電話とファックス　045-651-2305（診療所）　045-305-4322（鍼灸院・資料室）
E-Mail　info@kyoudouclinic.com
http://kyoudouclinic.com

発行：医療法人ことぶき共同診療所

目　次

２０１４年下半期を振り返って‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 鈴木　伸 ②
「鍼灸やすらぎ治療室」ブログより‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 馬頭　梨都華 ⑥
“診療室から”（34）－ 外来が「荒れる」日 －‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 弓野　綾 ⑩
寿町関係資料室コレクション ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 松本　一郎 ⑪
－【３】芹沢勇『神奈川県社会事業形成史』－
職員自己紹介 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 大塚　るみ ⑫
寿町地域ニュース・あらかると（’14 年 6 月～12 月）‥‥‥‥‥‥ 松本　一郎 ⑫
診療所日誌（’14 年 7 月～11 月）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 矢島　雅子 ⑬
共同診療所・鍼灸院ガイド‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ ⑭

2014年下半期を振り返って

2014年も気が付けばあとわずかとなりました。今年の夏は例年にない猛暑でした。こんなに暑くては、ダメよ、ダメ、ダメと思っておりましたら、あっという間に空気が冷え冷えとした季節となりました。最近は患者さんとも「次回が今年最後の診察ですね」という話題でしめることも多くなり、月日が経つのが早いのを実感しております。毎回、この話題でスタートしているので、「もしかしてだけど♪　またそのネタなんじゃないの～」と言われるといけませんので、早速診療所の下半期を振り返ってみたいと思います。

【「しらふの会」はじまる】

今年の 9 月から「しらふの会」というプログラムを開始しました。これは、AA やアルクといった「ミーティングはちょっと苦手」という方を対象としたプログラムです。当診療所の患者さんでもっとも多いのはアルコール依存症の患者さんなのですが、アルコール依存症だけの患者さんは少なく、薬物や統合失調症、知的障害など他の精神疾患や障害も抱えている方が多く、そのために大勢の前で話すという形式が苦手な方が多いのです。これまで AA やアルクといったミーティング形式のプログラムに拒否を示す患者さんに対しては、デイケア、デイサービス、作業所の利用、DOTsなど「やること作り」で飲酒の時間をできるだけ減らすという方向でケースワークをしてきました。もちろんこうした「やること作り」もハームリダクションの観点では有効ではあるのですが、もう少し精神療法的な要素もいれたいなあというのが長年考えていたことでした。

今回あたらしく加入された作業療法士の郡司さんが寿の患者さんに認知行動療法てきなプログラムをやってみたいという熱い希望があり、彼を中心に「しらふの会」を立ち上げた次第です。まだまだ試行錯誤の状態ですが、なるべく安心してくつろげる雰囲気を出し、参加してよかったなあと思ってもらうことを心がけておりま

す。依存症の治療に関しては「とにかく治療から脱落させないこと」「共感的な人に対応してもらうことで断酒率が高まる」とのエビデンスがあるためその二つの要素を大切にできればなあと思っております。

【ナンキンムシ(トコジラミ)の対応に追われる】

以前より寿町にはナンキンムシが比較的多いといわれていました。しかし、今年は猛暑のせいなのかナンキンムシがさらに増加し、対応に苦慮するケースが増加しました。たかが虫のことと思われるかもしれませんが、ナンキンムシのために福祉施設の通所を中止せざるを得なくなったり、また、すぐに入院精査が必要な状態の患者さんがやむを得ず外来対応を余儀なくされるといったことが相次ぐとのんびりとも構えていられません。中区役所も今回の状況を重視しナンキンムシ退治の補助金をだすといった対応をとっていただいているのですが、大変な状況がつづいています。2012 年 12 月の NHK クローズアップ現代でも「忍び寄る“スーパーナンキンムシ”」[1]と題し、殺虫剤に耐性をもつナンキンムシが世界中で繁殖し、ニューヨークのホテルが 1 か月閉鎖に追い込まれるなど対応に苦慮されている状況の特集があったのですが、常に時代の「先端」(?)を行く寿町にはいち早くその波が近づきつつあるようです。ちなみに、ナンキンムシには市販の殺虫剤では効果はなく(有機リン系、カルバメート系のものは効果があるとのこと)、すぐにできる対応は、①きちんと掃除をして吸い取る、②汚染された衣服は洗濯をして乾燥機にかける(45℃以上で数十分で死ぬとのこと)」ということだそうです。なかなか大変な問題ではありますが、患者さんの生活、場合によっては生命に関係する場合もあるため関係諸機関と相談しつつ、知恵を出し合って対応していきたいと思います。

【毎月見学者が当院を見学に来てくれています】

毎月のように当診療所には見学者が訪れています。これは当診療所の医療レベルが高いというわけではなく(本当はそうあってほしいのですが)、寿町という町が良くも悪くももっている「特殊性」によるところが大きいとおもいます。また、私自身が多少忙しくても見学をしたいという方を、町の様々な機関に協力して頂きながら(いつも

[1] http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3284_all.html

すみません)積極的に受け入れているところもあります。これはかつて自分が医学生時代にあちこちの現場に「道場破り」のように見学に行き、その時の経験がいまでもとても役立っており、「現場」に育ててもらったという意識が強くあるからです。

また、外部の方が入ることでどうしてもマンネリ化傾向にある現場が「いい加減なことはできない」と襟を正したり、当たりまえになりすぎて自分たちでは気が付けない欠点やときには長所に気が付けるからです。

今回も、外部の方が入ったお蔭で良い効果がもたらされたことがありました。今年7月に診療所に見学に来た看護師志望の高校生が、なんともう一度実習をしたいとの希望で9月にも再度診療所に来てくれました。患者の B さんは入浴が大嫌いでそれまではいつも足浴なども拒否をしていたのですが、見学の高校生が実習に来た日には不思議と足浴を受け入れてくれ、高校生に手伝っていただきました。その体験がよかったのか以後 B さんが入浴をうけいれるようになり、その効果は現在まで続いています。というわけで、今後も時間が許せば見学の方を受け入れていきたいと思います。

【今年も大運動会無事終了】

今年で第 13 回を迎えた診療所大運動会が 10 月 24 日に吉浜町公園にて開催されました。幸い天候にもめぐまれ、寿アルクをはじめ多くの関係機関の方に参加していただき、例年同様に大いにもりあがりました。競技のトリは毎年恒例のアルク vs その他連合軍の綱引きでした。みな勝負にこだわるあまり少しでも早く縄を引っ張ろうとした小競り合いがみられ、審判長から「綱にさわるな！！」との怒号が飛ぶという一幕もありました(笑)がなかなか見応えのある勝負が繰り広げられました。結果は体格に勝るアルクチームがまさかの 2 連敗で終わり、アルクの山田統括からも「慢心を戒めるべし」というありがたい言葉を頂き無事終了いたしました。来年もみなさんが元気な顔でこの運動会に参加していいただければと思います。

【アートの秋　患者さんが「短歌」をもってきてくれました】

当診療所の患者さんの中には、さまざまな特技を持っている方がいます。写真、書道、絵画などさまざまな分野の達人が作品をもってきてくれるのでご本人に了

解を得たうえで診療所に飾らせてもらっています。患者のCさんは以前調子が悪い状態が続いていました。カンファレンスをした際、ケアマネージャーさんから「Cさんは調子がいいときにはタンカなんか詠んでいたんですよ。でも最近は調子が悪くて・・・」という話がありました。「啖呵」を切る人はたくさんいるけど「短歌」を読む人は少ないなあなどと一人ボケながら「へえ」と聞いておりました。カンファレンスの結果Cさんの服薬に難があったことが分かり、支援体制を見直し、Cさんの状態はかなり安定しました。その後診察では「最近短歌はできましたか？」と時々きくようにしていたのですが、なんと最近では自分の作品である短歌を小さな紙に書いてもってきてくださるようになりました。詩の才能がない私からみると「すごい」としか評価のしようがないのですがとても良いことだと喜んでおります。ご本人に話したら快諾をいただきましたので、この場でいくつか掲載させていただきます。

夕付きて　島は凪ぎつつ　漁火の
はゆる五島の　海は恋しき

夜のはりに　名をよぶ　母の夢を見ぬ
老いてまずしく　風の中ゆく

診察は当然ながら「病気」の部分が話題の中心になることが多いのですが、患者さんの健康な部分の話題も増えてくるとよいなあなどと考えております。

【今年は 12 月 30 日（火）まで診療します】

例年年末年始の休みは患者さんが調子を崩すきっかけになることが多いのですが、今年は暦通りに診療すると 9 連休とかなり長期になってしまうため、12 月 30 日（火）の午前中も診察を行います。ご利用ください。

（鈴木　伸）

「鍼灸やすらぎ治療室」ブログより

10 年ぶりに寿におじゃましています。子どもを産むまでお世話になっていました。久しぶりに顔を出して、当時の心境を残しておきたい衝動にかられ、つたない文章にまとめてみました。鍼灸院が出来るまでの当時の雰囲気が皆さんに伝わると良いのですが･･･。

火曜日に行くところ

6月から火曜日を休診にして別の鍼灸院に治療に出ています。ことぶき共同鍼灸院。第一子の娘の育休に入るまで勤務していました。今日はここの鍼灸院のある 寿町について少し。

寿町は、横浜の石川町駅が最寄りになりますが、中華街や元町に行く人々も多く訪れる駅でご存知の方も多いのではないでしょうか。寿は中華街とは反対側に歩いてすぐの一画にある寄せ場です。寄せ場というのは、東京は山谷、大阪では釜ヶ崎あいりん地区などのような日雇い労働者やホームレスが多く集まり、一泊 2000 円くらいで泊まれるドヤが立ち並ぶ地域です。

昔は日雇いの集まる場所だけあって酔っぱらいやヤク中ややくざやら昼間から色々立ち入り乱れる吹きだまりのようなハチャメチャな街でしたが、今は日雇いの仕事が激減したことと住人の高齢化が進んだことにより、老人、病人、刑務所を出所したばかりの人などの社会的弱者の集まる街となっています。

この街に鍼灸学校の学生の頃、クラスメートの看護師の友人に誘われてボランティアに通っていました。

鍼灸学校の学生に何ができる訳でも無かったのですが、医療相談で血圧を測ったり尿検査をしたり、明らかに問題のある人には医師や看護師に引き継いでスクリーニング的な役割を果たし、他は世間話をしていました。

当時は 18 歳で怖いものもなく、ホームレスと話がしてみたかったというだけの動機で、他の様々な分野の学生（医学部の学生、医師、看護師、歯科医、社会福祉士を目指す学生など）と出会い、話を聞くだけでも充分楽しんでいたように思います。

この街にボランティアで来る様な医師は特に人間的にも素晴らしく、医療に対する真摯な姿勢に学ぶところが多かったものです。

まだ日雇いの仕事をしている人も多く、焚き火をして野宿したり酔っぱらって喧嘩をしたり、賭け事をして盛り上がったりしている場所もあり、気さくに話かけてくるおじちゃんがいたりと活気の残る時期でした。

私が参加させてもらった寿医療班ですが、寿に診療所をつくりたいと、その為に 40 過ぎて医師になった人がいました。その人が目的を成就してつくったのがことぶき共同診療所です。診療所が出来て何年か経ったのち、私が手を壊し整骨院を辞めていた頃に声をかけてくださったのがその先生でした。

ことぶき共同診療所ではまた色々な経験を積ませて頂いたのですが…。続きは長くなったのでまた今度。

続　火曜日に行くところ

さて前回の続き。ちらほらと面白かったという暖かい声援を頂いたので、勇気をもって先を進めたいと思います。

診療所勤務を始めましたが、最初は受付兼医療事務と精神科デイケアのスタッフの仕事をローテーションで交互に入るという形をとっていました。そうです、この事務処理能力の全く欠ける私が受付に座っていて保険の点数をつけていたのですから、地球がひっくり返らなかったのが不思議なくらい、いや相当な足を引っ張ったことは確実でしょう。それでも、この診療所では、出来るだけ業務を共有して医療者もスタッフも同じ目線で情報が共有できるようにと考えられて、そのようなシステムとなっていたようです。それは院長先生が交代された今も続き、一部のスタッフはそのようなローテーションを組んで勤務しています。

精神科のデイケアでは患者さんと一緒に買い出しをし、料理をしたり、園芸やお出かけなどのその日に予定されたスケジュールをサポートします。そのうち、デイケアで書道を教えてくれないかとのお声がかかり、書道を私が教え同時に美大出のスタッフが造形教室を始めることになりました。

デイケアでの書道はどうだったかというと、今にして思うとちょっと型にはまりすぎていたなと思います。当時は自分がお稽古で教わったようにしか教えることが出来ず、どうしても上手い下手で指導していました。ですが、自分の書きたい言葉だけを延々と書いておしまい、と言う患者さんや、下手だからと卑屈になって筆を取りたがらない患者さん、10 人 10 色でした。ならばと大きい紙を用意して前衛を書かせようとしてみてもうまく誘導できず挫折。今なら直線、曲線からはじめてフォルメンで各人の持つリズムを感じてもらうことに重点を置き内面の調和という治療的効果を意識した方法を用いるでしょう。当時は引き出しがなかったと反省とともに思い返せます。それでも、筆と紙があれば出来るのが書道の強みで、お正月には書き初めがあるし、仮名を書いて見たりして、私が勤務している間はずっと受け持たせて頂きました。

そこからさらに、同僚や街の支援者などに請われて書道を教え始め、夜間に第2の書道教室が生まれて今に至るのです。

そんな風に鍼から離れてしばらく過ごしていたのですが、ここでも優しい院長先生が「りつかちゃんがやりたかったら鍼をやってもいいんだよ。」との言葉を忘年会(?)か何かの飲み会の時に言われました。

私を横浜に導いてくれた友人の看護師はこの診療所で婦長として生き生きと働いていました。彼女も鍼灸師でしたので、彼女となら出来るかも…と思って二人で鍼灸院を開きたいとお願いすることになったのです。

さて、はじめての鍼灸院の開設は、どうなったのか、続きはまた今度。

まだまだ火曜日に行くところ

だいぶ間が空いてしまいました。あれも書きたいこれもと思っているとまとまりがつかず、下書きに放置されて早ウン週間。楽しみにされていた方すみません。

鍼灸院を開設することを決めたので、まずは場所決め。診療所付属の鍼灸院ということで始めは診療所の一隅でベッドを置いて鍼を打つというイメージがあったのですが、届け出には待合室のスペース、診療室のスペース、採光や換気、消毒設備などがチェックされます。保健所が確認しに来るということで、まずは余っているビルの部屋の一室を借りて準備をすることになりました。

当時はビルの 2 階の 1 室を借りてはじまった診療所でしたが、患者さんが増えると共に 2 室かり 3 室かり、最終的には 2 階のフロア全てを借りている状態になっていました(今は1階と2階の全フロアを借りています)。

2 階の一室というのは廊下を挟んで分厚い鉄の扉がある別戸のようなものでしたので、完全な個室でした。先生方は女の子がこんな場所で一人で鍼灸をするのに不安を抱かれたようです。開業してからも何度か「何かあったら心配だ。」とお気持ちを話されることがあったのに、私は当時全く耳に入らず、ここで鍼灸をしたい…という一念のもとに動いていた気がします。

今、人の子の親となって思うと、なんと無茶をしたものか。度胸試しのようにやっていた節もありますが、当時はやっぱり鍼が自由に打てる嬉しさが勝っていたようです。

(そして保健所はいつになっても確認に来ませんでした。それは永遠の謎です。ちなみに他の 2 ヶ所で私は開設していますが、そこにはどちらも確認に来ています。)

患者さんは生活保護による医療扶助で、診療所のドクターから同意書をもらってくる人が主体でした。でも、経歴はまさに様々で、日雇い労働により体を壊した人、刑務所を出てからホームレスになり生保を貰っている人、全身入れ墨で過去の悪行を自慢げに大声で話す人、薬物中毒、アルコール中毒、精神病質で社会に適応出来ない人、ただただ人の良い真面目な人、などなど。書き上げれば切りが

ないほど、一人一人がくせ者で、でもどこか人間臭い欠点と愛らしさがあって見放せない魅力を持った面々なのです。

さらには、そんな人を支える役所のCWや、街の中のスナックのママも患者さんでした。

当時の治療法は、今でこそ積聚（しゃくじゅ）治療という核になる見方を用いていますが、整骨院で覚えた筋骨格系に重点を置いた局所的鍼灸だけ。筋骨隆々の相手に気持ちよく一杯鍼を打っている毎日でした。が、もちろん場所が場所だけに、足を拭かないと治療が始められない、脱脂綿を使うと真っ黒になって何枚も必要だとか、往診に行った先では汚してしまった布団の洗濯から始まったり…。そんなことは日常茶飯事。

そして、治療には生活指導もつきものですが、これが殆ど不可能なのです。冷房で冷やすのは良くない、とか胃の調子を上げる為に自炊しなさいとか、体の治癒力を上げるには不可欠なのですが…。生活環境、経済状況、将来的希望で限界地点にいる患者さんに世間知らずの娘が要求するのでは響かないのです。相手に理解を求めるのは、あくまでも相手のハートに届く言葉を持っていることが必要だと、当時切に感じたものでした。

今こうして振り返ると、寿では治療技術を学ぶ先生はいませんでしたが、様々な問題を抱えた患者さんを取り巻く医療、社会システムの中で鍼灸治療をする意味と、人生の破綻をきたしている患者さんの心と繋がってどう立て直すかという治療家の本質に常に向き合わされる場所だったのです。

こんな未熟者に鍼灸院を開かせて下さった院長先生ご夫妻を始め、スタッフの協力があり、強面ながらも可愛い患者さん達に囲まれてなんと恵まれていたことでしょう。

一方で沢山失敗もしています。私が若くて苦労知らずで無神経だったお陰で、患者さんの心の痛みがわからず治療の翌日に自死した患者さんもいました。それ以外でも当時の多くの患者さんは年齢に関わらずお亡くなりになった方も多く、突然死や孤独死は場所柄とても多いのです。この人達とまた今度元気に会えるか分からない、そんな不安感、緊張感がいつでもある場所でした。

その他、患者さんの健康意識を高める為に鍼灸院で通信を出そうとして、あえなく2号でストップしたままにしました。これを寿のドヤ中に張ろうと意気込んで、ドヤの帳場さんに許可を求めて街中を走り回ったのも懐かしく、さらにそれを手伝ってくれたスタッフの優しさも忘れられません。この通信、ひそかにずっと復活させたいと思い続けているのですが…。やすらぎ治療室とことぶき共同鍼灸院の共同復刊なら出来るのでは…とか。はりねずみ通信と言います。これを見た人は覚えていてくださいね。

さて今回は長くなってしまいました。いよいよ次回はシリーズ最後で“今の鍼灸院”でいきますよ。

今のことぶき共同鍼灸院

毎週火曜日に行っている、ことぶき共同鍼灸院。その貴重な週1回は、とても居心地の良いものです。それはまさに“来てくれてありがとう〜”というスタッフの暖かい言葉や、雰囲気が気持ちを盛り上げてくれることに加え、現院長Nさんの見えない力が大いに働いているのです。

恥ずかしながら、いつも遅く出勤するのですが既にNさんは治療の人。でも私の治療道具や治療ベッドは整えられ、いつでも患者さんを受け入れられるように用意され、待合室やトイレは既に掃除が済んでいる…。私はそこで爪を切ったりカルテを見るだけで患者さんを待てば良く、終了後も「そのまま置いといて、置いといて」と片付けもせずに帰っていいよ、と。

しかも昼休みは私の仕事が終わるまでお昼を食べず、愚痴まで聞いてくれる。まるで、つきあっている彼氏の実家に遊びにいった彼女な状態。いや、温泉宿に泊まった文豪な気分（嘘）。そんな素晴らしい菩薩のようなNさんですが、もうかれこれ10年この鍼灸院を引っ張ってくださっている大大大ベテランです。

私がこの鍼灸院に対して何が出来たって、一番良いことをしたと思っているのはNさんを

スカウトしたことだと思っているのです。患者さんにとっては、気取らず構えず話を聞いてもらえる、そしてしばしば笑いをもらえる暖かな存在で、その器の大きさがあるからこそ皆が安心して通える雰囲気を作り出しているのです。

治療は痛いところがあれば誰にでもスッと手をあててくれるような暖かさがあり、真摯そのもの。人見知りの私から見ると、コミュニケーション能力の高さだけでも大変な大人です。

今の鍼灸院は場所が通りに面した明るい部屋へ移り、患者さんも私の時よりずっと増えて、鍼灸師も2名態勢の日が2日程あるようになりました。患者さんは相変わらず多彩な顔ぶれで、私が治療するのはわずかですが彼らの弾丸トークを聞くのは結構な楽しみです。

人それぞれの人生は全く異なる体験ですが、その中で彼らがどんな選択をして生きて来たのか、話の中から知ることができます。若さによって失敗もし、若さによっていたずらに度が過ぎたり、でもある時々を迎えてすこしづつ変容して来たんだな、と。

個人的には今の治療院では出会えない体のタイプの治療ができるのも職業的魅力ではあります。若い頃地方で育った人が多く、幼いころから農作業をしていた人などは体の骨格からそのエネルギーの強靭さが違います。自然の中で作られた体の力は、無茶苦茶ともいえる生活を送ってきても尚、衰えず治癒の力が素晴らしいのです。こればっかりは、ご両親やご先祖に感謝して欲しい、説教がましいことは言いたくないのですが、素晴らしい宝物を持って生まれて来たのだと。

対して、都会で育った今の若い人はかなり不利です。胃腸が弱く、運動もしていないと体のリズムが掴みにくい。体は健康ならば殆ど健康など意識せずに過ごせるものですから、地方で育った健康で頑健な男子達は若さを目一杯謳歌して生きて寿にきたのかなあ。

彼らを見ているとギリシャの時代を思いおこします。ヒポクラテスとかプラトンとかいた、あのギリシャの時代の教育は、少年期はもっぱら体育（舞踊をメインとした）ばかりだったと。知識を教えることは思春期になってからだったと。

体で学習することに重きを置いた、その為に彼らの記憶力は現代人と比べ物にならない程の力があったということです（参考　シュタイナー教育入門　高橋巖）。そして哲学者は今のように机に向かって本と格闘するものではなく、外に出て他者と議論をし、旅をして思索する歩く哲学者でした。私の見ている患者さん達も、様々な含蓄を持ち人生観を持ちました。ある意味哲学者だと思うのです。そして記憶力も素晴らしい。

体を使って生き流浪して来た人々、ことぶきに久しぶりに行って考察してみたところです。

（馬頭　梨都華）

“診療室から”(34)

外来が「荒れる」日

寿町での外来は、穏やかに進む日がほとんどですが、たまに荒れる日もあります。この「荒れる」の意味は数通りあり、

① 患者さんが重症で、素速い対応が必要なとき

② さらに患者さんを多数でお待たせしており、中に重症の人がいるとき

③ 患者さんが何らかの理由で怒っているため診療がすすまないとき、などです。

①と②はしばしば同時に起き（特に冬場は）、これから救急車に乗せる予定の患者さんの処置をして、具合を心配しながら、お待たせした他の患者さんに謝って診察させていただきます。寝ている人の具合が心配なのと、お待たせして申し訳ないのと、他にも具合の悪い人が待っていないのか心配･･･などなどで、胃がキュキュッと縮む感じのときもあります。そんな時に“具合かわりないよ～”とニコッとしてくれる方がいると、“ありがとう～”とこっちもホッとします。これじゃあ、どちらが患者さんか分かりませんね。

そうそう、今日は③の場合の話をしようとしたのでした。

患者さんが怒っている理由は“治療が思ったようにいかない”だったり、“待たされた”だったり、“具合がわるいので困っている”だったりします。全部のときもあります。怒って声を荒げている患者さんを前にしていると、正直、こわいなあ～と内心胃の縮むときもあるのですが、でも気をつけていることは、「私がここにいるのは、この患者さんが何に困っているかきいて、それをよくするためだ」ということを忘れないことです。どなり返したり、こっちも怒ったりしても、まず女性の私がパワーでかなうとは思われませんし、「患者さんが困っていることをきいて、どうしたらよくなるか考える」という目的に向かわないので、できるだけ「きくこと」「考えること」の方につとめます。そうしている内に患者さんから解決案がでてきたり、こちらがききながら、考えた改善案を提案して、「いいよ」といってもらえたときは、心の中で「はあ～よかった」と大きく一息です。そんな出会いをした患者さんも、何回か会っている内に笑顔で受診してくれて嬉しいときもあり、外来って不思議ですね。

今後も仕事を続ける限り、外来の荒れる日もあると思いますが、また穏やかな日に同じ患者さんと笑顔で会えることを楽しみに仕事していこうと思います。

（弓野　綾）

寿町関係資料室コレクション

【３】芹沢勇『神奈川県社会事業形成史』（神奈川新聞厚生文化事業団、1986 年 3 月、全 232 頁）

芹沢勇氏は、1911 年生まれ。1918 年、小 2 の時に横浜米騒動を経験。38 年横浜市視学(旧行政制度-松本注)、60 年民生局長、66 年収入役、69 年に退職し、70 年鶴見大学教授となり 81 年退職している。一方で、1961 年以降、神奈川県匡済会（本だより 36 号参照）の評議員・理事、1970 年から理事長を務めた。氏が民生局長や収入役であった 1960 年代は、寿町ドヤ街が完成し、寿町への行政施策が大きく動いた時期である。住民への相談機能や保育園を持つ、寿生活館(1965 年)、匡済会寿福祉センター(1968 年)が設置されたのもこの頃であった。氏が横浜市役所・匡済会幹部として寿町行政政策に対して与えた影響は小さくはないと思われる。

氏は、1967 年に論文「ドヤ街の発生と形成」（横浜市総務局行政部調査室）を出し、1976 年には「寿ドヤ街 －もう一つの市民社会と福祉－」（匡済会『福祉紀要』第 6・7・8 合併号）を編集(および執筆)している。氏が学究肌の行政官僚でありつつ同時に寿町への思い入れが強かったことが分かる。この 2 つは、寿町の歴史研究において外すことはできない最重要文献である。

それだけに止まらず、横浜市を中心に近現代の神奈川県全体に視野を広げて、貧困・低所得者を始めとして、高齢者、児童、障害者、医療、更生保護などの各分野を横断的に社会事業（概ね今の社会福祉や社会福祉事業を指す）の展開としてまとめたのが本書である。氏は、米騒動や関東大震災、京浜工業地帯の労働争議、第二次大戦等々、激動の時代に起こった戦前の数々の出来事を念頭に、寿町を考えていたのだろうと想像する。

本書の対象は戦前であり、寿町ドヤ街はまだ存在していない。だが、戦前寿町に近接する三吉町や中村町には木賃宿(きちんやど)[1]が多くあった。この 2 町は中村川をはさんで川沿いの両側に位置する。本書 133-135 頁に記述されている木賃宿数を時系列でみると、「明治末三吉町周辺木賃宿 50 軒ほど宿泊者 2000 人、宿泊者の職業は日傭労働者を主に人力車夫、巡礼、越後獅子、祭文語り、法界節等旅芸人や乞食、女の場合は紙屑拾いから茶焙（お茶場女工）で、子供たちはかんかん虫（船舶等の錆び落とし労働者。虫のようにへばりついてハンマーで叩いた。-松本注）として働きに出た」、1915 年には三吉・中村町周辺で木賃宿 45 軒、1923 年の関東大震災を経て、1925 年には木賃宿群の中心は三吉から中村町玉泉寺周辺に移り 35 軒と減り、1930 年には 37 軒であった(出典不明)。１軒あたり、40 人くらいが宿泊していたのであろうか。

現在、三吉町に 6 軒、中村町に 10 数軒の簡易宿泊所がある。だが、戦後生まれた中村町や寿地区簡易宿泊所と、木賃宿との関係は、連続なのか断絶なのか実はよく分かっていない。もちろん、共通点は安宿と日雇労働者の集住である。氏に一度お会いして、本書(と使用された資料)や 1960 年代のことを伺いたかったと時々思うことがある。

なお、氏が使ったであろう、匡済会社会事業図書館の資料は、1988 年県社会福祉協議会に「匡済会文庫」として移管され、現在は県立保健福祉大学図書館に再度移管されている。本書の巻末文献リストには、使用された多くの資料が割愛されているが、それらはここにあるのだろうか。ともあれ、まずは本書を先行研究としながら、遅れている神奈川県社会事業史研究を少しずつ前に進めなければならない。

（寿町関係資料室　松本一郎）

[1] 木賃宿は、旅行者が宿に自炊用薪炭代（木賃、木銭）を払い、持ち込んだ米等を自炊したり炊いてもらったりしながら泊まる形態の旅館である。そのため、食事がつく旅籠（はたご）に比べて安価に泊まることができた。中世以来の長い歴史がある。

職員自己紹介

大塚　るみ

6月から精神保健福祉士として主にデイケアでお仕事をしています。前職はケアマネジャーで診療所近くのケアプラザで働いていました。ケアマネジャーとして、またはホームレスの支援活動等を通して寿町を知り、そこで暮らす人達と関わって行くうちに、もっと深く関わりたいと思うようになり、このたび寿にどっぷりと浸かることになりました。

診療所に入職して5ヶ月が過ぎましたが、医師や看護師をはじめ職員の患者さんへの対応に愛のある職場だなぁと感じています。私は精神科で働くのは初めてなので、日々学ばせていただいておりますが、デイケアは依存症の方が多く通われており、依存症がどのような病気なのか知れば知るほど、支援者としての関わり方の難しさや面白さを実感しています。

まだまだ経験不足でどう支援すればよいのか戸惑うことも多いですが、徐々にやり甲斐を感じられるようになってきました。これか

知識

寿町地域ニュース・あらかると（'14年6月～12月）

【国の貧困対策関係】改正生活保護法施行[7.1]／子供の貧困対策大綱閣議決定[8.29]／社会保障審議会生活保護基準部会で住宅扶助・冬季加算について検討[第19回10.21、第20回11.18]【センター(寿町総合労働福祉会館)】神奈川県、神奈川県労働福祉協会(寿労働センターやことぶき就労サポートセンターを運営)が建替え後にセンターでは事業展開しないことを表明[10.7 防災拠点運営委員会にて]／建替え後のセンターゾーニング案提示[11月]【生活保護】県生活保護不正受給等防止対策連絡会が厚労省に調査権限の拡大等を要望[6.26]／林市長が生活保護世帯等に就労支援を行う「ジョブスポット」を 2015 年度中に全区で設置すると表明[9.9]【介護】訪問介護なかサービスが吉浜町で事業開始[5.1]【健康】中区高齢者健康維持支援事業・ことぶき高齢者健康維持支援事業(仮)開始[2014年度～]【衛生】横浜市中区環境衛生係、医療機関・簡易宿泊所等でのトコジラミ駆除費用の一部補助申請受付(4月1日に遡って施行)[10.1]【介護】リハビリデイわかばオープン(第二長生館 1 階)[12.1]【簡易宿泊所】(仮称)東会館新築中(寿町 3-9-6)／(仮称)長者町 1 丁目簡易宿泊所新築中(長者町 1-1-13) [11.30 現在]【教室】勤労協でメダカ飼い方教室開催[10.15]【歴史】寿福祉プラザ「寿町周辺地区郷土史調査レポート」発行[6月]

※ 寿町に関係する国・自治体の政策等も一部含まれます。　（寿町関係資料室　松本　一郎）

診 療 所 日 誌 ’14 年 7 月～11 月

7 月　精神科入院の多い夏の幕開けです

7 月 1 日　患者Ｋさん、リストカット繰り返す。
7 月 8 日　病院を自己退院し名古屋に向かったＴさん、一週間ほどで寿にＵターン。
　部屋に人が 40 人いて帰れないというＫさん、明日入院予定なので、急遽扇荘新館に宿泊してもらう。
7 月 9 日　昨日のＫさん、部屋にいられず行方不明。夕方発見され、翌日入院となる。
7 月 10 日　アルコールで退院したばかりのＳさん、センターで仲間と退院祝い。転倒して脳出血、救急搬送。
7 月 12 日　デイケア、森本さんコンサート。
　患者Ｓさん、診療所脇の駐車場で酔って睡眠中。炎天下脱水疑いで救急車を呼ぶ。
7 月 19 日～20 日　デイケア、夏の稲子。バーベキューと川遊びなど。
7 月 23 日～24 日　毎年おなじみの松本市からの高校生見学に見える。

8 月　今年の夏も暑い。暑い最中に沢山の見学の方が見えました

8 月 9 日　退院後、落ち着かなかったＹさん、24 条で入院となる。
8 月 14 日～15 日　またまた毎年おなじみの医学部学生さん、見学に見える。
8 月 16 日　診療所最高齢、Ａさんもうすぐ 94 歳。夏祭り頑張りすぎて熱中症。
8 月 19 日　自殺企図のあるＳさん、簡易宿泊所の管理人さんに見守られ、入院せずに過ごせる。
　アルコールのＭさん、糞尿まみれで生活。やっとのことで入院。
8 月 28 日　診療所最高齢Ａさん、94 歳の誕生日を迎える。

9 月　ミーティングに乗れない人たち向けのアルコールプログラム始めました

9 月 3 日　7 月に松本からやってきた高校生、看護師志望で 3 日間にわたり実習。入浴嫌いのデイケアＴさんの足浴を行い、以後入浴プログラムに参加するようになる。
9 月 5 日　DOTS に来ているＫさん、40 年ぶりに電話で義母と話す。「北海道に帰ってこい」と。しかし褥瘡もあり、入院となる。
9 月 11 日　看護大学の学生さん 2 名見学
9 月 12 日　アルコールのＹさん、大トラになり診療所に何度も突撃。
9 月 13 日　田中先生診察再開。待ってましたと、患者さん。
　しらふの会(アルコール断酒プログラム)始まる。
9 月 20 日　患者Ｋさんの訃報の連絡入る。
9 月 27 日　水をかけられると部屋に戻れないＨさん入院へ。が、5 日で自己退院。

10 月　寿町は南京虫が大発生

10 月 1 日　弓野医師、カムバック。半年は日本におります。
10 月 9 日　デイケア、羽田空港へ行く。寿町診療所のデイケアのスタッフさん、見学に見える。悩みはどこも変わりないですね。
　極度の貧血で入院になったＳさん、南京虫だらけで入院にならず。部屋の南京虫の数は横浜市の人口よりも多いのではと。
10 月 22 日　デイケアの入浴プログラム、Ｔさん定着する。
10 月 24 日　ことぶき共同診療所大運動会開催。団体戦の綱引き玉入れがんばりました。
10 月 25 日　野本医師、優しすぎると患者に怒られる。

11 月　またまた診療体制変わります

11 月 1 日　天田医師が毎週火曜日、吉廣医師が毎週水曜日午後、金曜日に診療が変わる。
11 月 13 日～14 日　日赤看護大の学生さん、実習の一環で寿へ。
11 月 15 日　デイケアＯさん、根強い依存症体質が発覚。
11 月 19 日　在宅ターミナルのＳさん、家族や訪看さん、ヘルパーさんに見守られながらぎりぎりまで家ですごし、入院となる。

（矢島　雅子）

医療法人
ことぶき共同診療所・鍼灸院ガイド

◇診療科目 精神科　神経科　心療内科
内科　整形外科　鍼灸

診療所

	9時30分　12時	14時　17時	診療科目
月	休 診		
火	鈴木伸・天田・渡部（月２回）	鈴木伸・天田・渡部（月２回）	精神科・神経科・心療内科・内科
水	土屋・熊倉・弓野	土屋・熊倉・吉廣	精神科・神経科・心療内科・内科
木	鈴木伸・大脇・土屋・三橋(第3)	鈴木伸・大脇・土屋・三橋(第3)	精神科・神経科・心療内科・内科・整形外科
金	鈴木伸・土屋・吉廣	土屋・吉廣	精神科・神経科・心療内科・内科
土	鈴木伸・田中(隔週)・鈴木美奈子(月２回・エコー検査)・土屋(月１回)・野本(月1回)		精神科・神経科・心療内科・内科

※12-14 時はお昼休み

鍼灸院 （鍼灸院は予約制のため、お電話等で確認の上、ご来院ください）

	9時30分　13時	14時　17時
火	新井・佐藤	新井
水	新井・富永	新井・富永
木	新井	新井
金	新井	新井

※13-14 時はお昼休み

○保険扱い

国民健康保険 各種社会保険 生活保護 障害者総合支援法（その他、医療福祉相談も受け付けています）

○心理判定

○寿町関係資料室

寿町にまつわる資料収集、調査研究を行う「資料室」を併設しています。

◇所在地

〒231-0025 横浜市中区松影町 2-7-17
リバーハイツ石川町 1・2Ｆ

◇でんわとファックス

（０４５）**651-2305**（診療所）
（０４５）**305-4322**（鍼灸院）

◇e-mail info@kyoudouclinic.com

◇ホームページ

http://kyoudouclinic.com

2014 年 12 月 12 日現在